

# 緑のエッセー

日本は山国です。  
 例えば、関東平野は河川が山から土砂を運んで作りあげたものですし、都市から少し離れたほとんどの集落は山に囲まれています。こうした成り立ちが国内のどの都市でも同じで、どの地域であれ、山と林野と関係することなく国土基盤、社会的基盤を維持することはできません。これが日本が山国たるゆえんです。

現在、林野に対する様々なニーズ、

からのニーズを受け止められる多様なチャンネルを持つことによって、集落を維持できる再生産を可能とすること。つまり、山を利用して山で生活の基盤を作っていくことです。

今回の森林・林業再生プランの全体を貫いているのは、市町村の森林整備計画制度を地域が責任を持って、地域の人々の意見を聞きながら、地域の成熟した資源を産業化していく「森林経営」という考え方。木を伐つたら、マ



四季折々の山村風景・林間めぐりを楽しみに過ごしている。  
 著書には、「転換期の東北林業・山村（共著）」「森林・林業・山村問題研究入門」（共著）、「現代森林政策学」（共著）等がある。  
 林政審議会委員、全国知事会先進政策センター専門委員等を兼ねる。  
 メールアドレス：shujisan@wate-u.ac.jp

で、高齢化など山村に現在ある問題も解決していくという、これまでの政策とはまったく違った狙いがあります。  
 これは資源が成熟した緑の山の本木を切って所得にし、マーケットに繋げ、需要のあるところに提供することで、産業として回し、起業や所得の拡大を図り、ひいては若者が山に帰ってくる仕組みを作ろうというものです。  
 今回のとりまとめには、基本政策の文章としては珍しく、多くの具体的な

新しいマーケットが次第にイメージできるようになってきています。大企業は自らが排出しているCO<sub>2</sub>を吸収する森林の整備をCSRとして行い、またビール業界では良質な水の確保のため、自分たちで山をつくり始めるなど、林野を背景とした新しい経済の仕組みと様々な人々のニーズが具体化・多様化して、山村へと押し寄せてきています。  
 いま必要なのは、個々の集落が整備され管理された森林資源を持ち、都市

ケットに繋ぎ、マテリアル(材料)として売り、所得にし、再投資するという循環を作っていくという考えです。  
 これまで、わが国の民有林に対する政策の内容は、森林そのものの維持と造成でした。これは明治以降、ほとんど変わっていません。しかし、今回の森林・林業再生プランには、今まで作り育て、成熟した森林資源を地域の資源として、地域創造型の産業に育成・転換する仕組みを地域に定着させること

内容が書かれています。何よりもこれらの内容を文章から事実へ変えていくため、政策と地域の協働作業をどのように進めていくかが最も重要です。  
 これから先、林野庁を含めた森林管理関係者の皆さんは、森林・林業再生プランの実現が、地域や日本、ひいては地球のためであり、また山国・日本の歴史を守り伝えることであることを認識し、生きがいを感じてしっかりと進めていただきたいと思います。